

茂福城跡・里ノ内遺跡Ⅲ発掘調査報告

2004（平成16）年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県四日市市には、周知されている遺跡が約600か所あります。このことは、古代から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠だと思います。

発掘調査しました茂福城跡は東海道近くに面した砂堆上に築かれた城跡です。かつて昭和53年に発掘調査が行われており堀跡とみられる溝状の遺構が確認されています。今回の調査でも茂福城跡に伴うとみられる堀らしい遺構を確認しました。おそらく二重の堀が存在していたとみられます。茂福城は、伊勢湾内の海上交通の拠点的な役割を担っていたと考えてよいのではないのでしょうか。少なくとも調査によって当時の人々が活動した足跡を僅かでしょうが解明できたと思います。

私どもは、これらの貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

富田山城線街路整備事業に伴い、遺跡の一部が現状変更されることになり、記録保存を図ることになりました。これを契機に、本書が四日市市における郷土史研究並びに三重県の古代史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓蒙にお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりましてご協力を賜りました地元の関係者、及び三重県県土整備部道路整備課、北勢県民局四日市建設部、四日市市教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成16年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市茂福町に所在する茂福城跡（もちぶくじょうあと）・里ノ内（さとのうち）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、次の体制により実施した。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査第一課 主査 野原宏司・技師 萩原義彦（平成10から13年度担当）
新名強（平成14年度担当）・主事 城吉基・技術補助員 酒井巳紀子
- 3 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第1課が行った。執筆・編集は、萩原が行った。
- 4 本書が対象とした実調査面積は、平成10年度が650㎡、平成11年度が25㎡、平成13年度が165㎡、平成14年度が98㎡、総面積が938㎡である。
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、平成11年3月6日から同年3月16日、平成12年1月11日から同年1月12日、平成13年4月10日から同年4月11日、平成14年8月20日の複数年度において行った。
- 6 本書で示す方位は、真北を用いた。
- 7 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（20版 日本色研事業株式会社 1997年）を使用した。
- 8 本報告書作成にあたっては、伊藤裕偉氏（斎宮歴史博物館）から御助言・指導を得ることができた。
- 9 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成10から14年度富田山城線国補街路整備事業である。
- 10 発掘調査の経費は三重県県土整備部が負担した。
- 11 本書が扱う発掘調査の資料等は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第1章 前言	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査結果	1
第4章 まとめ	9

挿図目次

第1図 遺跡位置図	第6図 Na4トレンチ平面図
第2図 遺跡地形図	第7図 Na5・6・7・8トレンチ実測図
第3図 調査区位置図	第8図 a・b・c・dトレンチ実測図
第4図 BP1・BP2・Na1・Na4トレンチ実測図	第9図 e・f・gトレンチ実測図
第5図 CP1トレンチ実測図	第10図 茂福城跡地籍図及び調査区

写真図版目次

図版1 史跡茂福城跡遠景（南から）・史跡茂福城跡近景（北から）
図版2 Na8トレンチ作業風景・Na8トレンチ完掘状況・aトレンチ完掘状況・gトレンチ土層断面 Na4トレンチ掘削前風景・Na4トレンチ完掘状況・CP1トレンチ掘削前状況・CP1トレンチ土層断面

I 前 言

1 調査契機

県道富田山城線は、東名阪自動車道の四日市東インターからの国道23号線へと繋ぐアクセスルートである。調査対象地である里ノ内遺跡・茂福城跡は、街路整備事業に伴い発掘調査が行われことになった。調査予定地は橋脚部分である。橋脚整備が進行する毎に調査を行う予定であり、複数年度にまたがって行うこととなった。過去に数度にわたって四日市市教育委員会が発掘調査を行っており、昭和52年には2重の堀跡と判断される遺構を確認している。また、平成10年度からの調査では堀の肩部とみられる遺構を確認している。

2 調査経過

発掘調査は、平成11年3月6日から平成11年3月16日及び平成12年1月11日から1月12日、平成13年4月10日から4月11日、平成14年8月20日にわたって複数年度において行った。調査そのものは、工事進捗状況に応じて行ない平成10年度8箇所（Na1～8）で650㎡、平成11年度2箇所（B P1～2）で25㎡、平成13年度7箇所（a～g）で165㎡、平成14

年度4箇所（C P1～4）で98㎡である。総調査面積は、938㎡である。調査自体は、大日本土木株式会社・朝日土木株式会社から作業員及び資材一式を供与という形で提供していただいた。調査が滞りなく終了できたのは、従事していただいた方々のご協力の賜物である。

3 調査方法

調査は、各トレンチ毎に遺構面まで重機によって表土除去を行い、その後遺構を人力で掘削した。また、調査区平面図及び土層断面図の実測は1/20で行った。遺構写真撮影は、現在架かっている橋脚から真下を覗き込むように行った。

4 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

- ・法第57条の3第1項

平成11年1月28日付四建第1067号（県知事通知）

- ・法第98条の2第1項

平成11年1月29日付教生第1835号（文化庁長官宛）

II 位置と環境

茂福城跡・里ノ内遺跡は、四日市市域の北部に所在する遺跡である。当遺跡は、大きく俯瞰すると東流する中小河川である朝明川と海蔵川によって形成された沖積平野上に立地している。また、大正8～9年間に圃場整備事業によって区画整理されている。区有地であった主郭の一部とみられる土壇が四日市

市指定史跡となっている。

中世から近世にかけての対象地周辺の城跡についてみておきたい。茂福城跡から北側に富田城跡、南側に浜田城跡・赤堀城跡・阿倉川城跡・羽津城跡などがある。ほとんどの城跡はかなり近接して存在していることが窺える。

III 調査結果

調査は調査区を1箇所毎に行い、その後埋め戻すことの繰り返しであった。また、平面上で遺構を確認することは、非常に難しく土層断面の観察に取支ることが多かった。さらに、ほとんどが現代の

視乱によってかなり削平されており遺構・遺物等は、どの年度においても検出することは難しかった。

平成10年度の8箇所のトレンチでは、堀跡らしい肩部を確認した。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000) 「この地図は国土地理院発行の「濠野」(委名「四日市西部」四日市東部)(1/25,000)を縮載したものである。」



第2図 遺跡地形図 (1/5,000)

Na1 トレンチは、 $6 \times 4.5\text{m}$ である。遺構は、検出することができなかったが断面観察では、やや堆積層について落ち込みが認められる。堀の肩部と判断するよりも、堀内の堆積層と考えたほうがよさそうである。

Na2 トレンチは、断面観察によると堆積層は自然堆積層と見られる。遺構・遺物は確認できなかった。

Na3 トレンチは、Na2 トレンチ同様に断面観察によると自然堆積層である。遺構・遺物等は確認できなかった。

Na4 トレンチは、 $39 \times 2.5\text{m}$ である。トレンチの北西側で落ち込みを1ヶ所と約30m離れた地点で幅約6mの落ち込みを確認した。それらの結果から2重の堀があったとみられる。

Na5 トレンチは、 $10 \times 2\text{m}$ である。トレンチの大体が過去の調査区と重なり合っており遺構は、ほとんど確認できなかった。堀と判断できそうである。

Na6 トレンチは、 $7 \times 5.6\text{m}$ である。平面で遺構を確認するのはできなかったが、トレンチ断面観察で落ち込みを確認している。堀の肩部の可能性が高い。

Na7 トレンチは、 $11 \times 2.8\text{m}$ である。遺構は確認できなかった。トレンチ断面においても水平堆積であり、トレンチの位置を考慮すると堀内である可能性が高い。

Na8 トレンチは、 $7.5 \times 9.2\text{m}$ である。落ち込みが確認されている。堀肩部と考えられそうである。

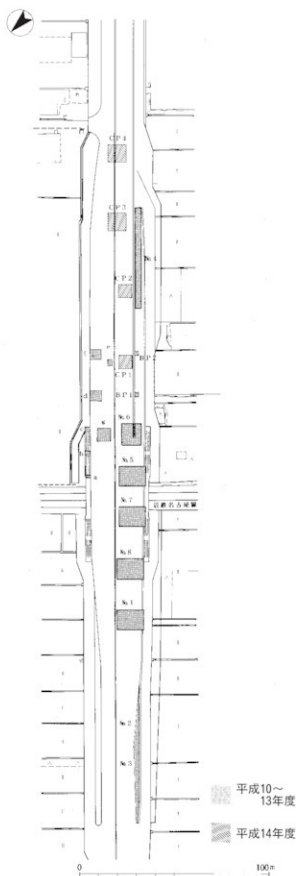
平成11年度で2箇所のトレンチでは、平面上で遺構と検出するのはやや難があった。しかしながら、トレンチ断面観察で堀肩部とみられる落ち込みが見られた。

BP6 トレンチは、 $3 \times 3\text{m}$ である。平面上では、堀肩部を検出できなかったがトレンチ西壁の断面観察によって落ち込みを確認している。

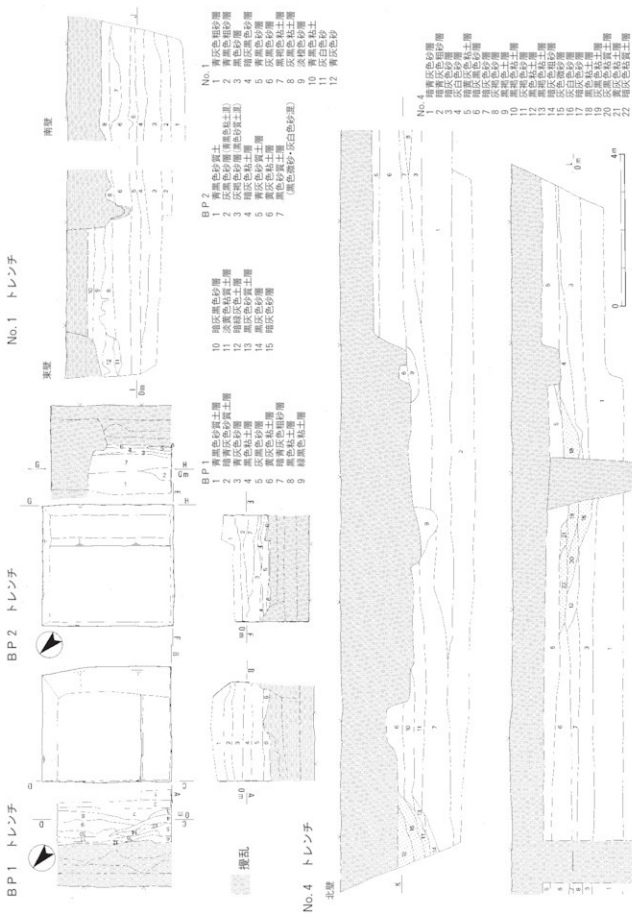
BP7 トレンチも $3 \times 3\text{m}$ である。平面上では、堀肩部を検出できなかったがトレンチの断面観察によって堀とも取れそうな落ち込みを確認している。

平成13年度の6箇所のトレンチでは、堀跡らしい遺構を確認している。

a トレンチは、 $4.8 \times 2.8\text{m}$ である。トレンチの平面・断面観察では、遺構・遺物を確認することはな



第3図 調査区位置図 (1/2,000)



第4図 BP1・BP2・No.1・No.4トレンチ実測図 (1/100)

かった。土層も水平堆積で、落ち込みなどはなかった。

bトレンチは、4×3mである。aトレンチと同様遺構・遺物を確認することはなかった。土層も水平堆積で、落ち込みなどはなかった。

cトレンチは、3×3mである。トレンチの大半は過去の調査に伴うものである。しかし、トレンチ断面観察からかつての調査区から僅かにはずれた部分で浅い落ち込みを確認することができた。

dトレンチは、aトレンチと同様遺構・遺物を確認することはなかった。土層も水平堆積で、落ち込みなどはなかった。

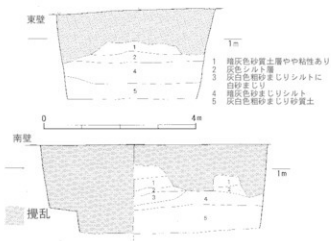
eトレンチは、現代ガス管が埋設されており5×4mの規模がやや小さくなった。トレンチ断面観察では、浅い落ち込みを確認した。我残だが堀の肩部と即断するのは難しい。

fトレンチは、8×4.5mである。aトレンチと同様遺構・遺物を確認することはなかった。土層も水平堆積で、落ち込みなどはなかった。

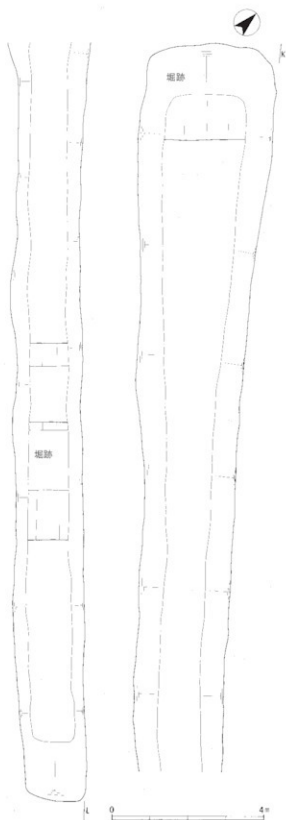
gトレンチは、9×7mである。平面上においてトレンチ隅において浅い落ち込みを確認した。ただ堀の肩部と即断することはできない。

平成14年度の4箇所トレンチで遺構は確認されていないとみられる。CP1の断面観察の結果からも自然堆積層と判断されている。

CP1 トレンチ

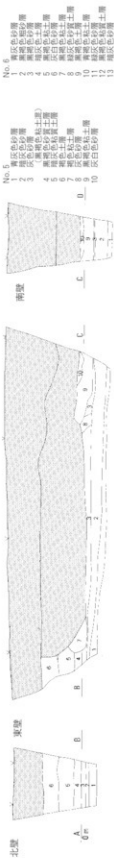


第5図 CP1トレンチ実測図(1/100)



第6図 No.4トレンチ平面図(1/100)

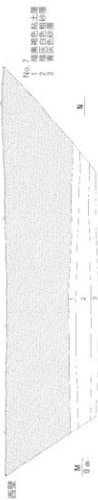
No. 5 トレンチ



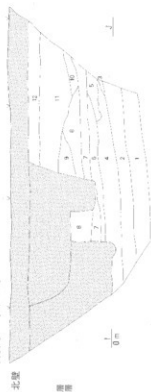
No. 6 トレンチ



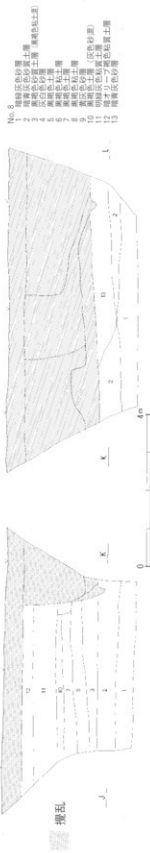
No. 7 トレンチ



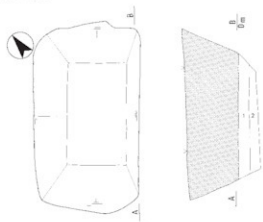
No. 8 トレンチ



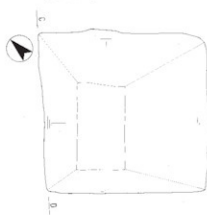
西壁



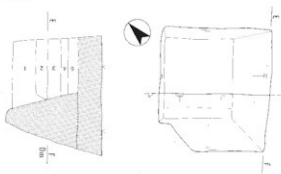
a トレンチ



b トレンチ



c トレンチ



a トレンチ
1 暗黒灰色粘土層
2 黒色粘質土層

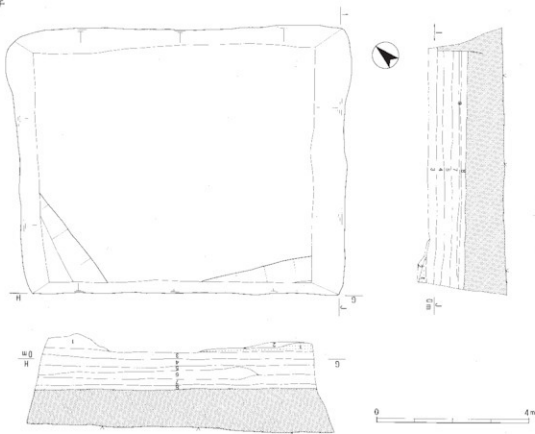
b トレンチ
1 黒色粘土層
2 黒色粘質土層

c トレンチ
1 黒灰色砂層
2 黒色粘質土層
3 灰黒色粘土層
4 灰黒色砂層
5 青黒色砂層

d トレンチ
1 暗褐色粘土層
2 灰白色砂層
3 灰黒色粘土層
4 灰黒色粘質土層 (灰白色砂を含む)
5 暗灰色砂質土 (灰黒色粘土混り)
6 暗灰色砂質土
7 灰黒色砂層
8 灰黒色粘土層
9 黄灰色砂質土層

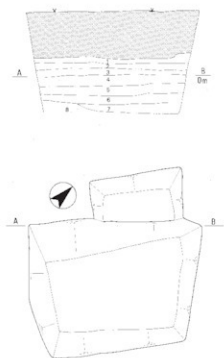
6 暗灰色砂質土 (灰黒色粘土混り)
7 灰黒色砂層
8 灰黒色粘土層
9 黄灰色砂質土層

d トレンチ



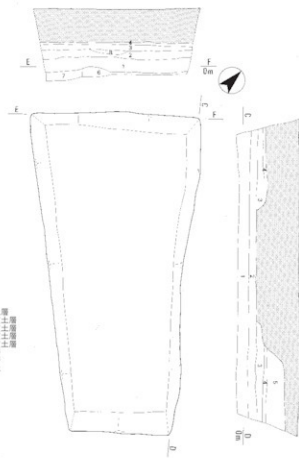
第8図 a・b・c・dトレンチ実測図 (1/100)

eトレンチ



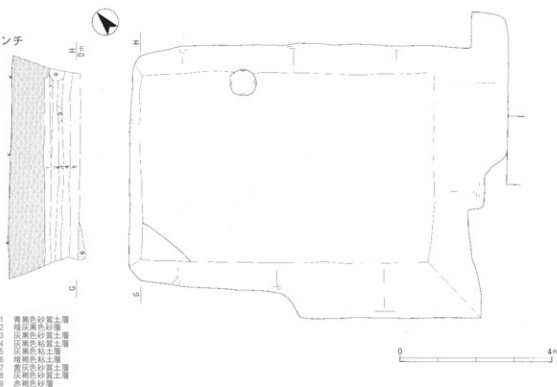
- eトレンチ
- 1 青灰色砂質土層
 - 2 暗灰色砂質土層
 - 3 暗灰色粘質土層
 - 4 灰黄色粘質土層
 - 5 暗灰色粘質土層
 - 6 暗灰色粘質土層
 - 7 暗灰色粘質土層
 - 8 暗灰色粘質土層

fトレンチ



- fトレンチ
- 1 灰黄色粘質土層
 - 2 灰黄色粘質土層
 - 3 灰黄色砂質土層
 - 4 黄灰色砂質土層
 - 5 青灰色砂質土層
 - 6 灰白色砂質土層
 - 7 黄色粘質土層
 - 8 黄色粘質土層

gトレンチ



- gトレンチ
- 1 青灰色砂質土層
 - 2 暗灰色砂質土層
 - 3 灰黄色砂質土層
 - 4 灰黄色粘質土層
 - 5 暗灰色粘質土層
 - 6 暗灰色粘質土層
 - 7 青灰色砂質土層
 - 8 暗灰色砂質土層
 - 9 赤褐色砂質土層

第9図 e・f・gトレンチ実測図 (1/100)

IV まとめ

1 茂福城の役割

茂福の名は、14世紀に成立したとみられる『神鳳鈔』において朝明郡茂福名三十三丁、三重郡用福名十五丁として名が現われている。茂福は、朝明郡と三重郡に分かれているが、おそらく同一地名であろうと推測される。茂福を指す地域は、朝明郡と三重郡の両郡にまたがっていたとみられ、現在の米洗川が流れを変化させながら郡境であった可能性が高い。また、『門葉記』延応元年（1239年）四条天皇宣旨において「伊勢国茂福庄」が見られる。少なくとも13世紀には、荘園として成立し、神宮領であったと言えることはできよう。さらに、『氏経御引付』によると内宮は、文明五年（1473年）六月日外宮庁宣写に阿濃津をはじめ四日市庭浦・用福浦・答志島などに設置された「新警固」について撤廃を要求している。15世紀第3四半期には、海の関所の港としての機能を持った役割を担っていたと思われる。

2 茂福城について

今回の調査では遺物を伴わない遺構を中心として

おり時期を決めるには難しい。しかしながら、今回の調査のなかで茂福城跡の堀跡と判断できそうな遺構を確認できた。また、過去の発掘調査においても堀跡とみられる遺構を確認しており、これらは一連の遺構と考えてよいとみられる。さらに現在の残っている土壇は、主郭の一部とみられるが土塁の残片の可能性もあろう。

さて、縄張りについて若干触れておきたい。茂福城は、土塁と堀によって構成された単郭の城館とみられている。しかし、四日市市教育委員会の昭和52年度の調査では、2重の堀があった可能性があると指摘されている。平成12年の調査では、No.4トレンチにおいて堀跡とみられる部分を2ヶ所確認しており、今回の調査と過去の分を重ね合わせると単郭の城跡と考えるよりも複郭である可能性があるのではなかろうか。とりわけNo.4トレンチでは、堀跡間が約30mであり、2重の堀があったことは間違いなさそうである。

[参考文献]

『茂福城跡』（四日市市茂福城跡調査会 1978年）



第10図 茂福城跡地籍図及び調査区（1/3,000）

図版 1



史跡茂福城跡遠景（南から）



史跡茂福城跡近景（北から）



No. 8 トレンチ作業風景



a トレンチ完掘状況



No. 8 トレンチ完掘状況



g トレンチ土層断面



No. 4 トレンチ掘削前風景



CP1 トレンチ掘削前状況



No. 4 トレンチ完掘状況



CP1 トレンチ土層断面

報 告 書 抄 録

ふりがな	もちぶくじょうあと・さとのうちいせきはくつちょうさほうこく							
書名	茂福城跡・里ノ内遺跡Ⅲ発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告							
シリーズ番号	249							
編著者名	萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tn0596-52-1732							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さとのうちいせき	よつかいしもちぶく ちょう	24202	564	新34° 59' 44"	新136° 38' 45"	平成11年 3月6日 ～16日	平成10年 度650㎡ 平成11年 度25㎡	国補街路 整備事業
里ノ内遺跡	四日市市茂福町			旧34° 59' 55"	旧136° 38' 44"	平成12年 1月11日 ～12日		
もちぶくじょう あと	よつかいしもちぶく ちょう	24202	253	新34° 59' 44"	新136° 38' 45"	平成13年 4月10日 ～11日	平成13年 度165㎡ 平成14年 度98㎡	
茂福城跡	同上			旧34° 59' 55"	旧136° 38' 44"	平成14年 8月20日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
里ノ内遺跡	集落跡	古墳時代	なし	なし				
茂福城跡	城館跡	室町時代	堀跡	なし				

三重県埋蔵文化財調査報告249

茂福城跡・里ノ内遺跡Ⅲ発掘調査報告

2004（平成16）年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷 共栄堂印刷株式会社
